



浄土真宗本願寺派

葬儀のしおり

浄土真宗本願寺派

滋賀教区高島組

はじめに

私^{わたくし}たちの浄土真宗本願寺派^{じょうどしんしゅうほんがんじは}で定め^{さだ}られた『葬儀規範』^{そうぎきはん}には、「葬儀^{そうぎ}は故人^{こじん}に對^{たい}する追善回向^{ついぜんえこう}の仏事^{ぶつじ}や、単^{たん}なる告別^{こくべつ}の式^{しき}ではなく、遺族^{いぞく}・親族^{しんぞく}・知人^{ちじん}・友人^{ゆうじん}が相集^{あいじつ}い、故人^{こじん}を追慕^{ついぼ}しながら、人生無常^{じんせいむじょう}のことわりを聞法^{もんぽう}して、仏縁^{ぶつえん}を深^{ふか}める報謝^{ほうしゃ}の仏事^{ぶつじ}である」と述^のべられています。

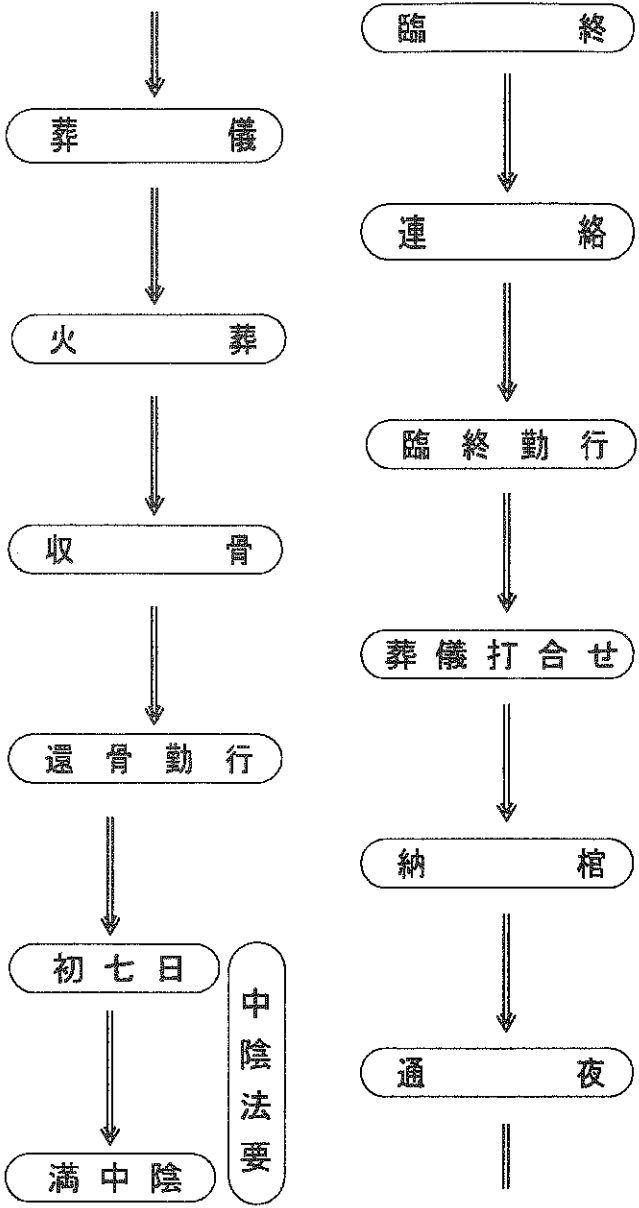
身近^{みぢか}な人^{ひと}の死^しは、私^{わたくし}たちの心^{こころ}を揺^ゆさぶり、今^{いま}の日常^{にちじょう}が永遠^{えいえん}に続^{つづ}くかのよう^{よう}に錯覚^{さくかく}して暮^くらしている私^{わたくし}たちに「やがては死^しんでいく身^みを、どう引き受^うけていくのか」と問^といかけています。「葬儀^{そうぎ}を勤^{つと}める」ということは、そのような問^といかけを、私^{わたくし}たち一人^{ひとり}ひとり^{ひとり}が、自分^{じぶん}自身^{じしん}の問題^{もんだい}として受けとめていくことです。また、葬儀^{そうぎ}を勤^{つと}める上^{うえ}では、世間^{せけん}一般^{いっぱん}の俗信^{ぞくしん}や迷信^{めいしん}にも惑^{まど}わされ^{され}ないよう^{よう}に心^{こころ}がけねばなりません。

このよう^{よう}な意味^{いみ}で、浄土真宗門徒^{じょうどしんしゅうもんどう}にふさわしい仏縁^{ぶつえん}を深^{ふか}める葬儀^{そうぎ}を行^{おこな}っていた^たきたいとの願^{ねが}いを込^こめて、この小冊子^{しょうさつし}を作成^{さくせい}しました。活用^{かつよう}して下さ^さることを願^{ねが}っています。

目次

葬儀をすすめる一般的な流れ	1
亡くなつたとき	2
臨終勤行	5
法名	5
納棺	6
通夜勤行	7
葬儀	8
火葬・収骨・還骨	14
中陰法要	16
納骨	18
以後の法要	19

葬儀をすすめる一般的な流れ



地域によって多少異なる場合があります。

中陰法要

亡なくなったとき

【連絡等】

・ 医師いしに診みてもらって、死亡しぼう診断書しんだんしょを作成さくせいしてもらいます。

・ 願ねがい寺でらに連絡れんらくし、臨終りんじゆう勤行こんぎやう（枕経まくらぎやう）を依頼いらいし、住職じゆうしやくの指示しじをあおぎまじよう。

・ 葬儀社そうぎしやに連絡れんらくする場合は、願ねがい寺でら（浄土真宗本願寺派じょうどしんしゆうほんがんじは○○寺じ）を必ずかならず伝えて下ください。

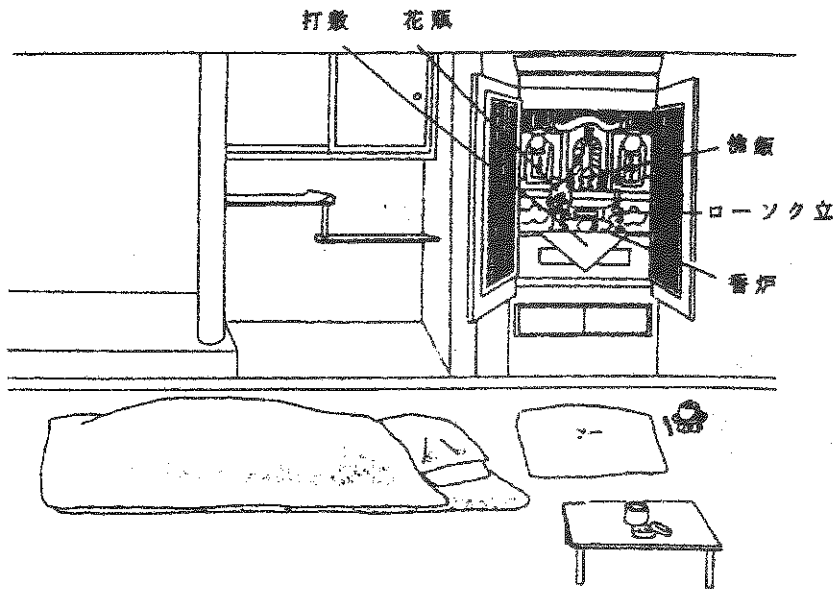
・ 葬儀そうぎの日時にちじは、遺族いぞく・親族しんぞくなどと十分じゆうぶん相談そうだんし、またお寺でらさんの都合つごうを聞き、日時にちじを決きめます。一般いっぱんにいわれる六曜ろくやう（友引ともびき・仏滅ぶつめつ等）は関係かんけいありません。

・ 市役所しやくしよへ死亡届等しぼうとどげとう（死亡診断書しぼうしんだんしょと一枚いちまいになった書類しよるい）を提出ていしつして、火葬場かそうじやうの手配てはいを依頼いらいして下ください。

・ 葬儀社そうぎしやと話はなしをする場合ばあい、葬儀社そうぎしやの用意よういするものの中には、浄土真宗じょうどしんしゆうとは関係かんけいないものがありますので注意ちゆういして下ください。

必要ひつようのないもの……帷子かたびら、三角頭巾さんかくずきん、脚絆きまはん、六文銭ろくもんせん、位牌いはい、塔婆とうば、お膳ぜん、忌中礼きちゆうれい、

清め塩きよめしお、巻き線香まきせんこう、花ローソクはな、葬儀そうぎの時ときのおしほりなど。



・ 必要のないものについては、最初にはつきりと「いりません」と、葬儀社に言ってお下さい。

【お仏壇の荘厳】

・ 仏壇を清掃し、普段の荘厳をします。荘厳は三具足（花瓶1、ローソク立1、香炉1）にします。

・ 仏飯を、仏飯器に盛ります

・ 仏花は色花を用いず、櫛（何本でもよい）又は、常緑樹にして下さい。

・ 打敷は、白地または銀色にします。（打敷の裏でも可）



体足が正面に



【遺体】

- ・遺体を仏間に安置します。しかしそれができない場合は、こだわりの必要はありません。(納戸など、他の部屋でも可)
- ・遺体に、いわゆる死装束は必要ありません。また、着物の左前もしません。
- ・お釈迦さまが亡くなられた時、頭北面西に臥しておられたところから、それにならって、遺体をなるべく北枕にして下さい。しかし、部屋の都合でできない時は、こだわりの必要はありません。
- ・合掌の姿で両手に念珠をかけて下さい。
- ・遺体の上には、魔除けのための守刀などは置かず、また、枕元には一膳飯、枕団子、水等は供える必要はありません。
- ・枕元に、香卓とその上に香炉を置きます。
- ・床の間には、南無阿弥陀仏の六字名号の掛け軸があれば掛けましょう。西国霊場巡拝譜等は掛けないで下さい。また、掛け軸、額などに白紙をはったり(紙封じ)、逆さ屏風などはしません。

臨終勤行

一般に「枕経」と言っています。遺体に向かつて勤行するものではありません。ご本尊（お内佛またはお名号）に向かつて勤めます。本来、人生の終わりに臨んで、阿弥陀如来に対する最後の敬礼の勤行であるため、本人が勤めるものですが、臨終を迎えようとしている人には不可能な場合が多く、願ひ寺の住職が本人に代わって臨終後に勤めるのが通例となっています。都合のつく限り、その場にいる人は一緒にお参りしましょう。

法名

法名とは、法の名、つまり仏教に帰依し釈尊の弟子となつて信心に生きる者の名前です。生きて居る時に帰敬式（おかみそり）を受けて、本山のご門主から「釈○○」という法名を頂戴します。帰敬式を受けていない人が亡くなった場合は、願ひ寺の住職がお手代わりとして法名を付けます。浄土真宗では、必ず法名と言ひ、戒名とは決して言ひません。

遺族の手によつて、お湯あるいはアルコールなどできれいに湯灌ゆかんします。
 最近さいきんは、病院びやういんや葬儀社そうぎしやが代わつて行おこなう場合ばあいが多いようです。
 清潔せいけつな着物まもの、または亡なくなった人ひとが生前せいぜん好んで着用ちやくようしていたものを着せかけ、顔かおを白布はくふでおおい、手てを合掌がっしょうさせ、念珠ねんじゆをかけます。

【しやうこんだん 莊嚴壇をもうける場合ばあい】

・お仏壇ぶつだんの前まえでお勤つとめができるように、お仏壇ぶつだんの前まえはあけておきましよう。
 ・正面しょうめんには必かならず、「南無阿弥陀仏なむあみだぶつ」のお名号みやうごうを掛かけます。(絵像えざうや木像もくざうの場合ばあいも
 あります) 遺影いえい・写真しやしんなどに隠かくれないように注意ちゆういして下ください。
 ・莊嚴壇しやうこんだん(葬壇そうだん、葬儀壇そうぎだん)は、ご本尊ほんぞんへの莊嚴しやうこんであつて、遺体いたいへのお飾りかざり
 りません。(祭壇さいだんとは言いいません)
 ・莊嚴壇しやうこんだんの莊嚴しやうこんも、普通ふつう、三具足みつぐそく(花瓶かひん1、ローソク立たて1、香炉かうろ1)にし
 ます。
 ・お花はなは色花いろはなではなく、紙華ししかを供そなえます。(紙華ししかはお釈迦しやくかさまが涅槃ねはんに入はいられた時とき、
 沙羅双樹さらそうじゆの花はなが、死しを悼いたみ悲かなしんで白しろく変かわつたことに由來ゆらいしています)

・ 棺ひつぎは、棺かん覆おおいで覆おおつて下ください。(七しち条じょう袈げ裟さで覆おおい、修しゆ多た羅らをかけることもあり
ます)

・ 供物くもつは、餅もち(团だん子ご)一いっ对つゐ、菓かし子い一いっ对つゐ、果物くだもの一いっ对つゐを供そなえます。水みず・茶ちや・塩しお・みそ・
一膳飯いちぜんめしは供そなえしません。

通夜勤行つやこんぎよう

人生じんせいで最もも悲かなしい別離べつりである「死し」という現げん実じつに直ち面よくして、遺族いぞくと共ともに在ありし日ひ
の故人こじんを偲しのびつつ、その死しを他人事たにんごととせず、自じ分ぶんの問題もんだいとして、真実しんじつのみ教おしえである
お念仏ねんぶつに出会であわせていただく仏事ぶつじです。

【勤行こんぎよう】

- ・ お仏壇ぶつだんの前まえで勤つとめます。
- ・ 住職じゆうしやくと一いっ緒しょにお勤つとめしましょう。(正信偈行譜六首引しやうしんげぎやうふるくしゆびき)
- ・ 地域ちいきによつては、参詣者さんけいしやの中なかのひとりひとりが調声ちやうしやうとなつてお勤つとめするところもあり

ます。

【法話】

- ・ご法話を聞く時は、静かに聴聞
いたしましょう。
- ・勤行中や法話中は会葬者への
答礼はせずに、お参りしましよ
う。

葬儀

(告別式とは言いません)

故人の死を縁に、その死を悼み、遺徳を偲び、仏縁に遇う儀式が葬儀であります。
浄土真宗の門徒である私たちは、平素からお聞かせいただいている「阿弥陀さま
まからいただく信心ひとつで、いのち終わったその時、お浄土に生まれ仏さまとな
らせていただく」という教えにふさわしい、節度ある仏事としたいものであります。



【出棺勤行】

・ 出棺の時のお勤めは、故人が生存中に尊い仏縁を結ばせていただいたお仏壇に、最後のお別れをするお勤めですから、必ずお仏壇の前で行います。

・ お勤めは「帰三宝偈」と言います。これは「深い因縁あつて、この人間世界に生を受け、遇い難い仏法に遇い、さらに、尊い本願念仏のみ教えに遇い、今こそ住みなれたわが家を出て、西方浄土へまいらせていただく」という意味をもつお勤めで、出棺にあたり拝読するのにも、もつともふさわしいものです。

【葬場勤行】

○自宅葬の場合

出棺勤行

葬場勤行

出棺

葬列

○寺葬の場合

出棺勤行

出棺

葬列

葬場勤行

「葬列を用いる場合の一例」

先駆さきがけ

供物等くもつとう

三具足みつぐそく

(花瓶・ローソク立かひん たて・香炉こうろ)

導師どうし

朱傘しゆがさ

結衆けっしゆう

(写真しゃしん)

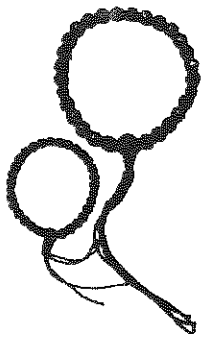
提灯ちようちん

提灯ちようちん

棺ひつぎ

遺族・親族いぞく しんぞく

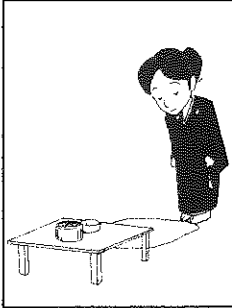
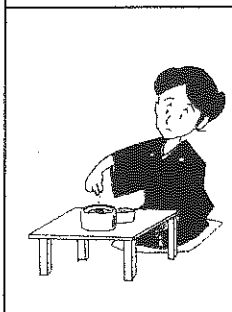
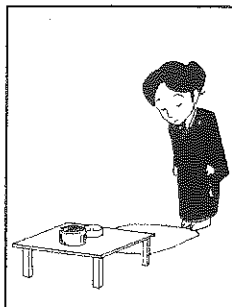
会葬者かいそうしゃ



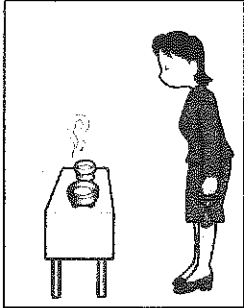
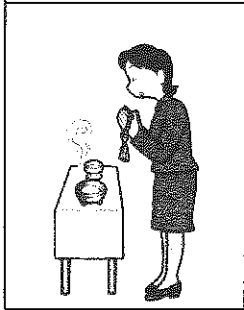
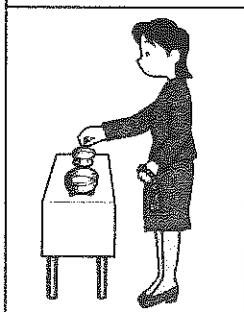
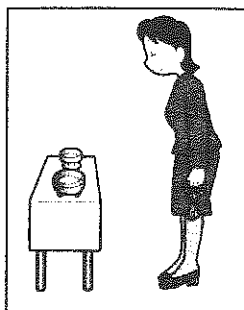
○葬場勤行の流れ（一例）

- 一、遺族・親族着席
いぞく しんぞくちやくせき
- 二、開式のことば
かいしき
- 三、導師・結衆入場 着席
どうし けつしゆうにゆうじようちやくせき
- 四、合掌 礼拝
がっしやうらいはい
- 五、「三三奉請」
さんさんほうじよう
- 六、作相 導師焼香
さそう どうししやうこう
- 七、表 白
ひやうびやく
- 八、弔辞（ある場合）
ちやうじ ばあい
- 九、「正信偈」 遺族・親族・会葬者焼香（五劫思惟から）
しやうしんげ いぞく しんぞく かいそうしやしやしやうこう ごとくしゆいから
- 十、弔電
ちやうでん
- 十一、合掌 礼拝
がっしやうらいはい
- 十二、導師・結衆 退場
どうし けつしゆうたいじやう
- 十三、閉式のことば
へいしき
- 十四、謝辞
しやじ

焼香しょうこうの仕方しかた（座すわって行おこなうとき）



焼香しょうこうの仕方しかた（立たって行おこなうとき）



① 焼香卓（しょうこうじやく）の2・3歩（じょく）の前まへで、一礼（いちれい）をします。

② 焼香卓のところで進み、香（か）を1回（いちかい）だけつまんで、おしいた

だかずに焼香（しょうこう）します。

③ 合掌（ごうしょう）し、お念仏（ねんぶつ）を称（な）え礼拝（らいはい）いたします。

④ 2・3歩（じょく）後（ご）へさがって一礼（いちれい）をして、もとのところ（ところ）へかえります。

○葬儀での二こころがけ

・葬儀は、阿弥陀如来さまの前で遺族が故人とお別れする最後の厳肅なおつとめです。そのため、おつとめ中には会葬者への答礼は慎み、遺族代表挨拶を通してお礼をできるようにします。

・焼香をするとき、導師や喪主・施主への礼は必要ありません。

・浄土真宗にふさわしい葬儀をしましょう。

・莊嚴壇には、一膳飯、枕団子、水などは供えません。

・出棺のとき、茶碗を割りません。

・葬儀のあと、清め塩は使いません。

○葬儀で慎みたいことば

(慎みたいことば)

(適切なことば)

・永眠しました

お浄土へ還りました

往生の素懐をとげました

・おやすみください

お導きください

- ・ご霊前（みたま）
↓
ご仏前
- ・草葉のかけで
↓
お浄土で
- ・天国
↓
み仏の世界で
- ・告別式
↓
葬儀
- ・冥福をいのる
↓
亡き人をしのんでお念仏をとなえる

火葬・収骨・還骨

【火葬】

- ・斎場での勤行を「火屋勤行」と言います。「重誓偈」または「讚佛偈」のお勤めがあり、参列者は順に焼香します。
- ・火屋勤行の後、炉前に移動し茶毘にふします。

【収骨】

- ・火葬終了の案内があると、収骨となります。
- ・お墓と大谷本廟に納骨するための二つの骨壺を用意します。なお、近親者で

分骨を希望する人がいる場合は、そのための骨壺も用意します。近親者に分骨することは、お釈迦さまのご遺骨を八つの地方に分骨したとの故事にもならない、結構なことです。

骨壺は大きくなくてよく、遺骨も多くを収める必要はありません。

【還骨】

収骨が済めば、遺骨を本堂（または自宅）の仏前に安置して、還骨勤行を勤めます。

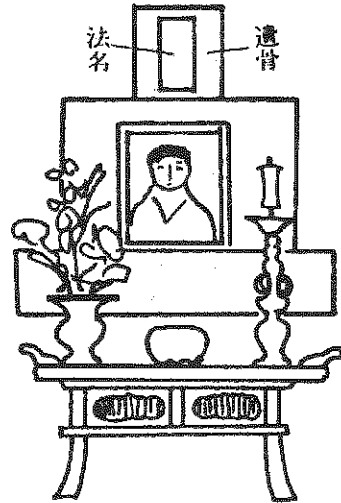
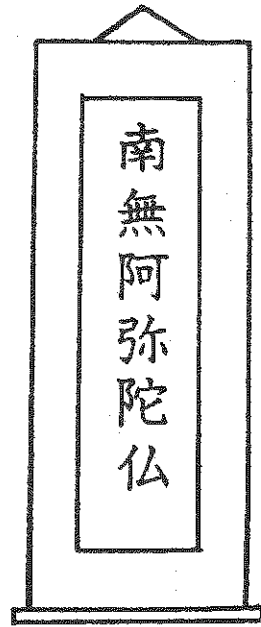
その後、遺骨を自宅に持ち帰り、中陰壇を設けて安置します。

【中陰壇】

中陰壇は、お仏壇の横に設けます。床の間に設ける場合には、正面にお名号（南無阿弥陀仏）をお掛けし二段か三段位の段をつくり、白布を敷きます。上段には法名、遺骨を安置し、下段には三具足（ローソク立て、香炉、花瓶）を置きます。

なお、一膳飯や水、お茶を供えるのは他宗の作法であって、浄土真宗では

いたしません。また、中陰中はローソクを常につけておくとか、線香を絶やさないといい、また、中陰中はローソクを常につけておくとか、線香を絶や



中陰法要

・中陰とは、故人が亡くなった日(命日)から数えて、七日目を初七日といい、七七(四十九日)までを言います。

・浄土真宗における中陰とは、亡き人への追善供養ではなく、亡き人を通して世の無常のことわりを自分の身に受けとめ、亡き人を偲ぶとともに、その遺徳を思い、

さらには人間に生まれてきたことの意義を問い、人生の真実にふれるべく、教えを聴聞していく期間であると心得て勤めるようにしましょう。

・初七日法要は、故人が亡くなって七日目に勤めるものですが、最近では参列する親類縁者の都合も考え、葬儀当日に勤めることが多いようです。

・満中陰は七七日に勤めます。中陰に関するいろんな迷信が言われますが、迷信や俗信に惑わされないようにしましょう。

【亡くなられてからの一年間】

初七日

(命日を入れて七日目)

二七日

(初七日の一週間後)

三七日

(二七日の一週間後)

四七日

(三七日の一週間後)

月忌

(命日から一ヶ月後)

納骨のうこつ

五七日いつなのか

(よなのか 一週間後)

六七日むなのか

(いっなのか 一週間後)

満中陰まんちゆういん

(むなのか 一週間後、命日を入れて四十九日目)

百ヶ日ひゃっかにち

(めいにち 命日を入れて百日目)

※中陰法要は、右に示す当たり日に勤める本日勤めと、その前日に勤める速夜勤めがあります。地域によつて違いますので、詳しくは住職に聞いて下さい。

- ・満中陰がすめば、中陰壇を取り払います。お仏壇の荘厳も平常にもどします。
- ・お骨は、満中陰が過ぎたら、適当な時期にお墓および大谷本廟へ納骨します。
- ・お墓への納骨は、お骨を骨壺から出し、直接にまたは布に包んでお墓の下に納め

ます。

・大谷本廟の納骨には、祖壇納骨と無量寿堂納骨とがありますので、願い寺の住職に相談して下さい。

時期については、満中陰後、一周忌後、三回忌後などを目途にしてはどうでしょうか。

以後の法要

【月参り】

・故人の毎月の命日に住職にお参りしてもらって勤める佛事を「月参り」と言います。「月忌参り」とも「遠夜参り」とも言うことがあります。

・花を立てかえ、お仏飯をお供えし、お菓子や季節の果物など、心づくしのお供えをします。

・家族そろってお参りするようになしませう。

【祥月命日】

毎年一度おとずれる故人の命日のことを祥月命日と言います。月参りをしてもらわない場合、祥月命日に住職にお参りしてもらいます。
 ・お内仏の莊嚴は月参りと同じです。
 ・家族そろってお参りするようにしましょう。

【年回法要】

一般的な年回法要

年回法要	命日から
一週忌	1年後
三回忌	2年後
七回忌	6年後
十三回忌	12年後
十七回忌	16年後
二十五回忌	24年後
三十三回忌	32年後
五十回忌	49年後
百回忌	99年後

・二十五回忌にかわり、二十三回忌と二十七回忌を勤めるところもあります。

・このほかに、三十七回忌を勤めるところもあります。

・百回忌以後は五十年ごとに勤めます。

・年回法要は、命日のその日に勤めるのが基本ですが、参詣する人が集まりやすい

ように、命日に近い休日^{きゅうじつ}に勤めることが多くなっています。

・法事の日程は、よく「命日を過ぎてはいけない」と言われますが、日を遅らせる

と粗略なイメージがあるからでしょう。多くの方がお参りできるようにと考

れば、日程は命日を過ぎてても構いません。

「葬儀のしおり」

大阪教区基幹運動推進委員会編

「浄土真宗葬儀のしおり」

滋賀教区教化推進協議会編

「浄土真宗本願寺派葬儀勤行聖典」

豊原大成編・著 関真会出版部発行

「浄土真宗本願寺派葬儀のしおり（長野教区版）」

長野教区教化推進協議会編

「浄土真宗の葬儀」

奈良教区教化推進協議会編

「新たなる出発のために」

真宗大谷派東京教区教化委員会

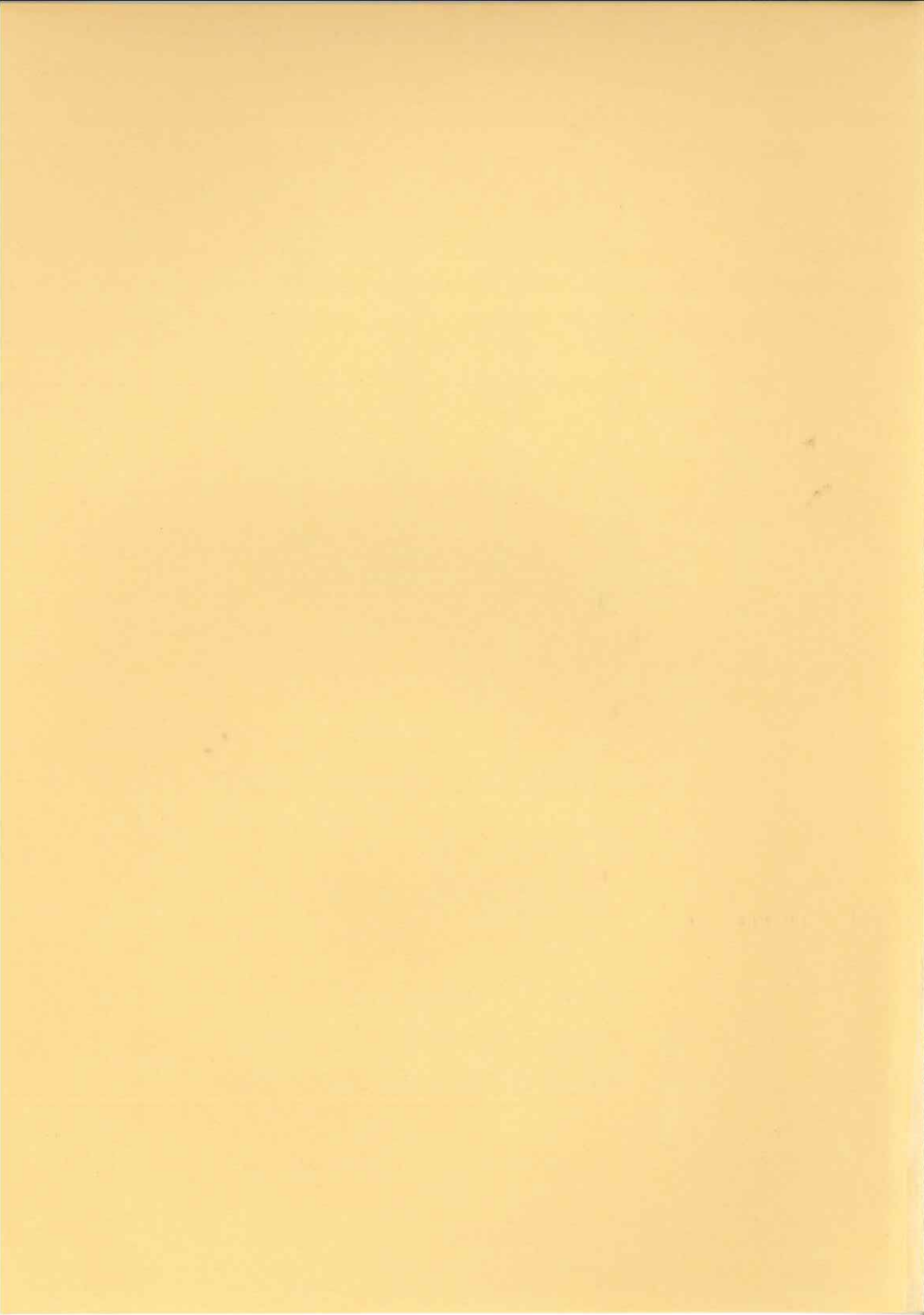
「浄土真宗本願寺派仏事作法なんでも大事典」

アミ研編 中国新聞社発行

この冊子は、浄土真宗本願寺派滋賀教区高島組において、北・中・南組より代表委員を委嘱し、「葬儀のあり方研究会」（後記）を組織し、一年間、毎月一〜二回の協議を重ね、素案を組内住職に提示して意見を求め、また、総代研修会において検討し、さらに斎場関係者、市内葬儀社（五社）との話し合いを経て作成したものです。

《葬儀のあり方研究会委員》

組長（北組）	泉慶寺	杉生	慶道
副組長（北組）	萬明寺	川原林正達	
相談員（北組）	勝専寺	三上	慈雲（事務局）
（北組）	受行寺	宮島	了真
（中組）	長寛寺	八代	孝憲
（中組）	通安寺	大塚	泰雄
（南組）	浄勝寺	三矢	征雁
（南組）	浄照寺	和治	摩也子



生死しやうじノ苦海くかいホトリナシ

ヒサシクずシツメルワラヌば

彌み陀だ弘ぐ誓ぜい言いノ子ねノミツぞ

ノセテカナラスワズずシ允

(親鸞聖人 高僧和讃)

浄土真宗本願寺派

葬儀のしおり

2007年3月31日発行

編集 高島組「葬儀のあり方研究会」

発行 浄土真宗本願寺派滋賀教区高島組